

げんのう和尚―牧庵鞭牛十

人足六万九千三百八十四人

文 中野 東禪

“腹帯村はまずしく、その上、人数も少ない。部落の力をもってしては、この難工事はいたしかねる。百姓どもは普請の技術、順序、方法など不案内のうえ、人足も少ないので、ぜひなく貴師のお慈悲によって下検分を願ひ、工事についてご下知たまわりたい。”

という手紙をうけとつたのは、宝暦八年三月、鞭牛さま四十九歳の春であつた。

このころは、幕府の命によつて川筋の木材乱伐が禁止されていた。村の肝煎り^{かまじ}たちは代官所に、まず道普請と木材乱伐の許可を願ひ出て、それから工事にかからねばならない。

茂市村腹帯の大淵の難所を改修する工事は、三月二十三日から二十七日までの五日間、人足延べ二百五十人であつた。

川水すれすれであつた道は五、六尺上げられ、あるところは石を組み、あるところは岩を削つて幅がひろげられた。これが、閉伊川筋七カ村普請のはじまりであつた。そして、そこに道供養碑が建てられた。

宝暦八寅年 施主勘治

道供養碑 橋野村林宗六世

三月廿七日 人足村中

ときざんだ。

中一日おいて三月二十九日には、隣村の川井村老木の農民たちに請われて、下川井の難所九十六間を改修した。四月七日まで九日間の仕事であつた。

こうして、四月十九日には下流の川井村さらつぼの難所、四月二十八日には茂市村ふぐとりの難所、五月三日には墓目の熊の穴の難所と、休むひまもなく閉伊川ぞいの普請はすんだ。

とくに、熊の穴の難所工事はすさまじいものだった。激流の中にかたい崖の壁がつつ立っているこのあたりでは、結局、十五メートルから二十メートルほどの崖の上部をけずつて道をつけるよりほかに方法はなかつた。ひと一人がようやく通れる岩場に人足数十人が

とりつき、大岩の上の岩の目に薪をつみ上げて火をつけ、岩塊を充分に熱するのであった。その炎と煙は天をこがすばかりであった。

そして、ころあいを見はからって、一せいに水をかけて岩の目にそってくだく方法であった。これは古くから岩屋が石を切り出すときに用いた方法であったが、鞭牛さまは、いっどこで知ったものか、こうした技術を心得ていたのである。

古老は、そのときの様子を次のように言いつたえている。

“鶴嘴ど玄翁〔かなづち〕だけでハ、いづまでかがったって五人や十人くれでハ（くらいでは）果てるもんでね（もんじゃない）。鞭牛っていう人ハ、ではんで（ずいぶん）工夫がいがったんだな（よかったんだろう）。岩も熔げるんでねがど（ないかと）思うっくれ（思うほど）火を焚ぐがら、そばさんかいられだもんでね。岩の焼げぐあいを計って「よしっ」っていっどこで（ところで）、あっちゃこっちゃ（あっちこっち）がらいつべんに水をかけさせる。ンで、岩が焼げくだげる時のさまハ、本当にものすげエもんだったど。”

こうして、この年は梅雨になる前までに大難所十ヶ所をひらき、四十一日稼働し、延べ三千六百八人、一日平均九十人の人足の協力があつた。そして少なくとも八カ所に道供養碑が建てられた。

もちろん、こうして堅い岩の間にすきを見つけてきりひらく道であつたから、岩にそつて登り降りするけわしいものであつた。荷を背負つて歩く御天馬役（助郷）の農民にとつて、決して楽な道ではなかつた。しかし、水に流される心配だけはなくなつた。

閉伊川筋の難所開削は、翌宝暦九年には五月から十月にかけて三カ所、さらに十年、十二年にかけて数カ所を手がけた。

その間にも、十三仏の霊場に『大般若経理趣分』一文一石血書供養や、花輪村の長沢川の架橋、南川目の七ツ滝発見、北川目の難所開削、ふるさとの和井内村に薬水湯を発見、南に降りて、船越村の人々の請いにより、大槌道の難所開削、南無阿弥陀仏碑の建立など、請われるままに精を出していった。

工事中の鞭牛さまの宿や身のまわりの世話は、村の肝煎りたちの仕事であつた。

青森の恐山へ参詣する奥まいり街道は、宮古から田代に至る途中にある雄又峠を越えて下るあたりは、一面の大木で、狼や熊が出て往来の人たちを困らせていた。たまたま田代街道の改修工事に來ていた鞭牛さまは、この話を聞いて、肝煎りの家に村人をあつめて話したという。

「そこを通る時ハ、ぜって（ぜつたいに）二人以上で、大きい声で念仏唱えながら歩がねどわがねぞ（歩かないといけないよ）」と言って、そこで死んだ人たちのために南無阿弥陀

仏の碑を建ててくれたのであった。

ひまがあると、平らな岩を見つけては座禅をしていた。あるとき川原の岩で座禅をしているとき鉄砲水にあった。村の者たちはあわてて逃げたが、鞭牛さまは水にながされてしまったにちがいないと心配して、水が引いた川にもどってみると、ずぶぬれになってものとまんま座禅をしていた。その肝のすわりに、村人たちは度肝をぬかれてしまった。

こうして宝暦十三年（一七六二年）、鞭牛さま五十三歳のとき、閉伊街道完成を記念して、山田町大沢に六角塔を建てたのであった。それには、鞭牛さまと仲間たちの、万感のおもいがこめられていた。それは、あの怨念をのこして死んでいった飢渴人の霊たちへのたむけであった。

道橋普請供養塔

普請悪難所百八カ所

和井内村薬水湯開起

人足六万九千三百八十四人

宝暦元年より同十二年迄

願主林宗六世牧庵鞭牛大和尚

当時の宮古、大槌代官所管内の人口は四万六千人であった。